

過去と現在、未来をつなぐ税

黒澤蓮（岩手・宮古市立川井中学校）

毎年八月十五日。私は大きな供養塔の前で踊る。独特の太鼓の拍子に笛と鉦^{かね}。跳びはねると鳴る鈴の音、五色のしごき帯が軽やかに、そして華やかに翻る。

「田代念佛剣舞^{たしろねんぶつけんげい}」。祈祷と先祖の供養を兼ね、五穀豊穰、家内安全などを願う舞。私が住んでいる地区に、約二一〇年、江戸時代から伝えられてきた郷土芸能だ。回向^{えこう}（供養）を目的とする儀礼的「御墓踊^{みほかおどり}」は、剣舞の創始者の墓所、初盆を迎えた家の墓前で、戦時中でも欠かさず踊られてきた。また、円陣となって踊る「舞台踊^{ぶたいおどり}」（剣舞）は、地区の集会所や、数多くの芸能祭で披露されてきた。

父に連れられていった稽古場で、この剣舞と出会い、物心ついた時には、もう踊っていた私。初舞台は三歳の時。単純に踊ることが楽しかったし、父の喜ぶ顔を見るのも好きだった。踊ることが好きだという父の血が私にも流れていると実感できる喜びが、私の一番の原動力だったように思うが、十四歳になった今でも、私は踊ることが楽しくて仕方がない。太鼓の音が聞こえてくると、胸が高鳴る。上手に踊れた時の高揚感・達成感は格別だ。

しかし、それだけではないもっと大きく強い思いが、今、私の心の中にある。

現在、多くの民族芸能が過疎化や少子高齢化のために、存続の危機に直面している。私の住む地域も例外ではなく、剣舞保存会の会員は年々減少し、踊り手の不足が課題となっている。先祖の方々が代々大切に受け継いできたものを守りたい…、絶対に途絶えさせてはいけない…、その責任が私にはある…。

最近、文化財の保護にも税金が使われていることを知った。生活や風土とのかかわりの中で先人たちが生み出し、現在まで守り伝えてきた有形・無形の文化財を、国民の財産ととらえ、確実に次世代に継承していくために、調査研究や記録作成、修復保全などに努めるほか、発表の機会の提供などにも税金は使われている。私たちが年に何度か出演する発表会や郷土芸能祭も、県主催のものだったり、県の助成を受けていたり…、自分たちの活動が税金とつながっていることがわかると、税金というものを身近に感じるようになった。そして、とてもありがたいことだと思った。

二年前、「田代念佛剣舞」は「岩手県指定無形民俗文化財」になった。指定されたからといって、私たちの踊りが変わったわけではない。昔からの踊りを大切に守り続けていくだけだ。しかし、気持ちの面では大きく変わった。私たちが守っているのは「県の文化財」であり、私たちの活動を納税者である岩手県民が応援してくれているのだと思うと、うれしくなるし、身の引き締まる思いにもなる。

私は今年も、先祖への敬慕、未来への責任、応援してくれる人への感謝の気持ちを胸に、心を込めて踊る。私の誇りである「田代念佛剣舞」が、納税者をも励ます舞になるといいと思う。